

民主化闘争情報

No. 1029
2020年3月13日
発行 日本鉄道労働組合連合会
(JR連合)

雑誌「選択3月号(3月1日付)」で、「安全運行を脅かす革マル派『分裂劇』JR東日本で『労組リスク』が増大」との見出しで、JR東労組から分裂し新労組「JR東日本輸送サービス労働組合」が結成された動きを紹介する記事が掲載された。記事では、新労組について「発足した新労組はJR東労組の中でも過激な一派が飛び出してできたもの」「新労組に加わった大半は運転士や車掌といった旧動労のコアを構成する組合員であり、誰が見ても『松崎カラー』を継承する組織であることは間違いない」、さらに「分裂した新労組の幹部はほぼ全員が、JR発足以降に入社した人間。国鉄を知らない世代にも浸透する旧動労の生命力は馬鹿にできない。革マル派労組が退潮したにもかかわらず、JR東の安全の脅威が増すという皮肉な状況が生まれている」と警鐘を鳴らした。

革マル派への警戒心を決して緩めてはならない?!

JR東労組分裂で経営リスクが増大か?!

JR東労組は、同組織において“人格的代表者”として崇められた松崎明氏が2010年12月に死去して以降、動労型労働運動の継承を進めてきた。革マル派最高幹部でもあった松崎氏の著書を使った勉強会が繰り返し開催され、さらには革マル派同盟員「トラジャ」らによる「敬松塾」などの学習会も開催され、そこには若年層の組合役員なども参加していたという。分裂で結成された新労組の幹部がJR採用者で構成されている実態を見ると、彼らが仕込んできた“バトンゾーン”のたたかい、がこうした形で進んでいることを認識しておく必要がある。

また、雑誌「選択」は、「革マル派が伝統的に掲げる『組織建設第一主義』『潜り込み戦術』を考えれば、JR東労組を単純放棄することは考えづらく、旧労組も革マル派残党労組の色が濃い」と指摘する。まさに、今回の組織分裂という、組合員を蔑ろにしてまで打って出た“大胆な戦術”の奥底にある彼らの本当の狙いを私たちは正しく見極めるべきであろう。

革マル派思想教育によってJR入社世代にも活動家が相当浸透か?!

一方、革マル派は、2018年の春闘以降、今回の分裂劇も含めてJR総連・JR東労組の動向に対して沈黙を続けている。この間のJR東労組の組織瓦解や分裂・新労組結成もすべてお見通しであり、まるで、革マル派活動家の世代交代と増殖という目的に沿って一連の動きを許容し、かつ歓迎しているかのようだ。

そうした中、革マル派の刊行物である「新世紀(2020年3月・305号)」に、「1972年動力車労組の反戦順法闘争」という記事が掲載された。「新世紀」は革マル派構成員必読の機関誌と言われており、彼らに党の方針を伝える役割もあると聞くが、このタイミングで“動労の順法闘争”に関する記事を掲載した意図にはどのようなメッセージ性が隠されているのだろうか?!

いずれにせよ、東京オリ・パラを目前に控えた重要な時期に差し掛かっている中、とりわけ運転士を中心として首都圏輸送を担う職場に非民主的組織の活動家が多数潜り込んでいるとすれば治安上の観点からも極めて忌々しき問題である。

JR東日本には経営のパートナーとなる強固な労使関係が必要!

こうして蠢く革マル派勢力を封じ込めるためには、JR東日本において真に民主的な労働組合の勢力を拡大し、以て健全で強固な労使関係が職場の隅々まで行き渡ることが極めて重要である! JR連合は、そうした認識に立って、「JR連合ビジョン」を掲げて加盟単組と将来を見据えた労働運動に取り組むとともに、民主的な労働組合の重要性や健全かつ強固な労使関係の必要性について、JR東日本をはじめとして様々な関係主体に訴え続けていく!